第93回　全国高等学校野球選手権大会（地方大会）規定

第93回全国高等学校野球選手権大会の地方大会に参加する学校は、この大会が1915年（大正４年）に創設されたとき掲げた目標、「野球を通じて社会に役立つ立派な人間づくりを目指す教育の一環としての高校野球」の精神を尊重し、つねにルールを守り、真剣でフェアなプレーに徹するよう心がけて下さい。

試合規定は、全国大会、地方大会とも同じです。ただ、地方大会では、その地方によっていろいろな事情がありますので、ここには基本的な約束ごとを掲示します。大会規定の詳細は、各都道府県高等学校野球連盟と、その地方の朝日新聞の本社、あるいは北海道支社、福岡本部、各総局とでつくる地方大会運営委員会で実情に合わせて定めます。

◇選　手　登　録

１．地方大会に参加する学校は、平成23年度大会参加者資格規定により、定められた選手資格証明書（健康証明書を含む）に、大会に出場する責任教師、監督、選手を記入、地方大会運営委員会に登録する。

２．チームまたは選手が大会参加者資格規定に触れたときは、それが分かった時点で相手校に勝利を与える。なお、責任教師、監督加、大会参加中の試合に関する不正行為をしたときは、同様に相手校に勝利を与える。

（イ）大会参加者資格規定に触れたチームが大会組み合わせ抽選会後に判明した場合、失格として相手校を不戦勝にする。

（ロ）大会参加者資格規定に触れたチームが試合中に発見されたときには、ただちに試合を没収して相手校に勝利を与える。

（ハ）大会参加資格規定に触れたチームが試合後に判明したときには、そのチームの勝利を取り消し、最後に試合を行ったチームに勝利を与え、それ以前にさかのぼって再試合は行わない。

◇試　合　規　定

１．試合は2011年度公認野球規則、アマチュア野球内規、高校野球特別規則を適用する。

２．降雨、日没等の天候状態によるコールドゲームは、７回完了、もしくは、７回表終了とする。また、得点差によるコールドゲームを採用し、５回以降10点差と７回以降７点差とする。決勝は天候状態および得点差によるコールドゲームを適用せず、天候状態で９回まで完了しない場合は再試合を行う。ただし、決勝以外の試合でもコールドゲームを採用しない場合は、あらかじめ全国高等学校野球選手権大会運営委員会に届け出て承認を得る。サスペンデッドゲーム（一時停止試合）は行わない。

３．スピーディーな試合進行を図るため、守備側、攻撃側とも「タイムの回数制限」（高校野球特別規則）を適用する。

４．試合が延長になっても勝敗が決まらないときは、選手の健康管理を考えて15回で打ち切り、再試合を行う。

５．試合が引き分けになったときや、雨やその他の事情で開始時刻が遅れ順延になったときは、その試合は原則として翌日の第１試合に組み入れる。ただし、選手の健康管理や大会運営などの都合で、主催者は試合の順序や日時を変更することができる。

試合順序を変更するときは、主催者が当該校の立場、条件などを慎重に考慮して決定する。また、学校側はこの決定に従い、応援者などがトラブルを起こさないよう十分配慮すること。

６．試合は昼間試合を原則とする。夜間照明の設備がある球場では、試合途中で日没になれば照明をつけてその試合を続行することができる。

ただし、あまりにも夜遅くなると予測されるときは、主催者は打ち切りの時刻を考える。また、試合開始が予定よりかなり遅れ、日没が近いときなども選手の健康管理上、主催者の責任で順延を決める。

７．試合中、選手に不慮の事故などが起き、一時走者を代えないと試合が続行できないと審判委員が判断したときは、相手チームに事情を説明し、臨時の代走者を出すことができる。（高校野球特別規則）

８．監督と選手は審判委員のジャッジに対して抗議することはできない。審判委員に対するアピールができるのは規則適用上の疑問をただすとき認められるが、主将、伝令または問題の当事者に限られる。

９．走者やベースコーチらが、捕手のサインを見て打者にコースや球種を伝える行為を禁止する。もし疑わしい行為があれば、審判員はタイムをかけ、当該選手と攻撃側ベンチに注意をし、止めさせる。

◇審　判　委　員

１．地方大会の審判は地元の審判委員で行う。

２．審判委員は試合の進行に対して全責任を持ち、たとえ時間に余裕があっても不必要な時間を省いてスピーディーに試合を進行すること。

〈注〉選手に何よりも望まれるのはきびきびした動きである。攻守の交代も駆け足で行うよう指導し、審判委員もグラウンド内では常に駆け足で行動すること。

３．審判委員は、監督がベンチから出て抗議をしたり、選手がジャッジに従わずに抗議を繰り返すような場合、退場を命じて速やかに試合の進行を図らねばならない。退場を命じられた監督や選手がその判定に従わず、そのために試合を続けることができないようなときは、試合を没収して相手チームに勝利を与える。

４．試合の進行が遅れて途中で日没が予想されたり、天候の状態でコールドゲームを宣告しなければならないときなどは、審判委員はあらかじめ両校の責任者に事情を説明し、万一コールドゲームになってもやむを得ないことを徹底するよう、細心の注意をはらわねばならない。また、一般の観覧者にも試合の合間に場内放送で事前の説明を繰り返し、トラブルとならないよう最善の努力が必要である。

５．試合中にトラブルが起きたときは、その試合を担当する審判委員が責任を持って処理にあたることを原則とする。裁定に苦しむようなときは控え審判委員、または大会役員の意見を聞いて裁定の参考にすることはやむを得ないが、そのため必要以上の時間を空費したり、控え審判委員らの意見をそのまま受け入れて判定を下すような無定見な審判ぶりは好ましくない。担当の審判委員は事前の打ち合わせを十分にし、常にチームワーク良く動いて、控え審判委員らの意見はあくまで参考として責任ある判定を下すこと。

６．審判委員は応援者を試合に干渉させてはならない。もし、応援者が騒いで試合の進行を妨げ、試合を続けることができないときは、主催者（大会本部）と協議して試合を没収することがある。

〈注〉高校野球には､公認野球規則に加えてアマチュア内規､高校野球特別規則がある。審判委員は、日本高等学校野球連盟審判規則委員会が製作した「高校野球審判の手引き」をもとに慎重で果断な判定がのぞまれる。

◇注　意　事　項

１．参加の各学校は 2011 年度公認野球規則、その他、必要な書類などをよく読んで間違いを起こさないよう努めること。

２．金属製バットは 2001 年秋から適用された新基準（規則 1 ・ 10C 注３）によるものとし、製品安全協会のＳＧ基準に適合した製品に限る。

３．打者、走者およびベースコーチは危険防止のため、必ずＳＧマーク付（製品安全協会認可）両耳つきヘルメットを着用する。捕手は防護用ヘルメット（ＳＧマーク付）とスロートガード（のど部分の防護具）、カップを使用する。また､練習時を含め､捕手が座って投球を受けるときは必ずマスク、ヘルメットなど捕手防具を着用する。

４．ベンチへは、危険防止の上からも鉄棒、バットにはめるリングなどの持ち込みを禁じる。その他、ベンチ内へは必要最小限の物のほかは持ち込まないようにする。試合中ベンチ内での携帯電話、テレビ、ラジオの使用を禁止する。

５．主催者は選手、一般観覧者の負傷、急病などに備え、球場には必ず医務員を常駐させる。事前に球場に近い病院とも十分連絡して、救急の際の入院、手当てなどができるよう万全の態勢を整えておく。

〈注〉死球などを受けてけがをした選手の手当てが不十分だったり、絶対安静を要する者に対して安静を欠いたり、無理をさせたりしたために取り返しのつかない事態になった例がある。こうした事態の起こらないよう万全を期するとともに、万一発生したときは適切な処置ができるよう特に気をつける。

６．出場チームは､その地方大会の試合が開幕した時点から大会と関係のない試合をしてはならない。

主催：日本高等学校野球連盟・朝日新聞社